

白金葎

二月号



平成31年2月発行

第95号

定例会（毎月第三金曜日 アビスタ会議室）

三月十五日（金） 第五正午～三時…春の月、蜷

四月十九日（金） 第四正午～三時…当季雑詠五句

五月十七日（金） 第五正午～三時…当季雑詠五句

兼題参考句三月十五日分（春の月、蜷）

石橋に春月の光^{かげ}さしかゝる

山口誓子

別るべき家や春月幹にさす

〃

水中界蜷の徐行のつづくなる

〃

畦道に蝙蝠傘^{かうもり}さして蜷を見る

〃

紺緋春月重く出でしかな

飯田龍太

一月例会句会報（19／2／15 吹越、野焼 9名欠3）

光成高志

吹越や与謝野晶子も来し出湯

吹越が出湯の窓をうちに打つ

渡良瀬の野焼の炎屏風立ち

遠筑波あつて枯株田を焼ける

あら近や寒暁の月木金が

田宮敦子

剪定や脚立の上は外国人

ふきのとう音なく雨の降り始め

野火止や野火と野火とが会うところ

吹越や山頂駅のドア開き

立春や赤いほっぺの男の子

佐藤宏之助

口歪む薬飲みしか仕丁雛

指差してこの路の臺私のもの

噴煙も見ゆ一望の野焼跡

浅間より吹越信濃の旅半ば

往きに見てまた帰りにも路の臺

浅野正美

節分や年の数だけ豆かぞえ

強東風の天に舞うパラグライダー

車窓から白梅紅梅桜まで

野焼あと草の芽起す風の道

吹越や餌に集まる兔かな

光
みち

野焼見て一切合切忘じけり
学窓に馴れて蛙の目借時

暗がりに火を焚く明かり節分会

増田陽一

芭蕉枯れいつの間にやら吹き溜り

野火消えて筑波二峰のよく見ゆる

吹越や墨絵のやうな最上川

初恋の人に直球鬼は外

松村幸一

雪の精雁ヶ腹摺山を越え
窓に焼野卓上に鹿肉カレー
ターザンが喚ぶ幼年の春の山
焼原にまみれて帰る白鳥か
歳月の空白渡る鶯か

二手にも三手にも野火の暮れながら

磯目健二

野火守の誰にも遠き火となりぬ

雄叫びの野火の薄となりにけり

小町塚あるをこころに野焼かな

汝が胸も燃えよと山火夜もすがら

仲本興正

シロツコも吹越の風地中海
風花に誘はれひらく梅一輪
群雀逐はれて空へ蘆を焼く
遠野火や平野に佇む無人駅
蘆焼くや煙火たなびき沼繚渺

吹越の夜や産室のあたたかき

風花も祝ぐや赤子を見舞ひきて

めらめらと日を焦がしゐる野焼かな

飯田孝三

白魚の白凝こりをり目の周
吹越や賽の姫神紅足され

野火離さかる小江戸町中鐘櫓
豆撒きや無念横綱稀勢の里
飼犬にもポッキーチョコをバレンタイン

中川素子

白樺館へ匂ふ蠟梅はけの径
春浅し懷紙をこぼれ金平糖
吹越や陶工の碑に日の射して
吹越のオランダ風車河川敷
伊豆の夜や野焼のあとの露天風呂

吉羽多美子

風花や生みたて卵買ひをれば
初場所や背中に砂の勝力士
どこまでも我につきくる落葉かな
新しき廻しに砂や初相撲

光成高志

一句鑑賞
口歪む薬飲みしか仕丁雛

宏之助

仕丁雛の顔をよく見ると口が歪んでいた、これは薬を
飲んだためであろうかと想像したのです。ほんとは作者

が今飲んでいる苦い薬を仕丁雛に飲ませたのでしょうか。
そこにユーモアが湧いてきます。諧謔と言ってもいいで
しょう。「雛壇に赭しや顔がんの老いの仕丁雛」(誓子)にあ
るように、酒焼けした赭ら顔の老いた仕丁はきつと良薬
たる苦い薬を飲んで脚を投げ出して座っているのです。
ふきのとう音なく雨の降り始め

敦子

芋の葉や蓮の葉に雨の振り出しを告げる音を聞くのは
ちよつとした発見ですが、この句は音無く降り始めた雨
を露の臺を見ていて気付いたのです。早春の雨の風情を
伝えて、一句の本情は余寒でありましょう。

野火止や野火と野火とが会つところ

敦子

野火止という地名にて野火と野火が左右から燃えて来
て二つが会つところ、という句意です。これは察するに
埼玉県の武蔵野のおもかげを残す平林寺に吟行したとき
に出来た句と思います。「野火と野火とが会つところ」は
恰も見たように作られているのが敦子さんの創作、文芸
作品として成立しています。また脱線です。昭和五年に
高浜虚子一行が平林寺界隈を吟行した文章が富安風生に
よって書かれています。これに野火止塚、業平塚のこと
智慧伊豆公の廟所のことなど書かれてあり、しかし、虚
子は帰りの土手に皆で座って休んでゐた時が一番気持ち

よかったですねと言われた、としめくくっている。ここが一番いい。これに魅せられて私も二回平林寺を巡りました。芭蕉が十二才の時に川越藩主であつた松平信綱により野火止用水が開削され、今もこれが残っています。

吹越や山頂駅のドア開き

敦子

「蔵王温泉からロープウェイで、一気に地藏岳へ、そこから熊野岳を経て中丸山そして蔵王ラインへ降りるコースである。参加者は山の会のヴェテラン6名。8時15分にロープウェイが出発。眼下は穏やかな雪景色。これなら行けそうだと、地藏駅に降り立つ。途端に駅舎へ強風が吹きつけ、気温計は-8℃を示している。積雪は2.5m。時おり日がさすものの視界は30mほどしかない。」この文章は七年前の四月八日の蔵王地藏岳の登山日記の某氏のブログです。敦子さんはこれと同じ経験をしたのです。山頂駅のドアが開くと途端に吹越に吹き付けられた経験です。私も樹氷を見に行つて同じ経験をしました。吹越の兼題によく当てはめて作句されました。

一句鑑賞

磯目健二

吹越の夜や産室のあたたかき

興正

知らせを受けて風花舞う寒風の夜道を産院に駆けつけ

ると赤ん坊は無事誕生。その安堵感で産室の温もりに初めて気付く。下五の「あたたかき」は室温ばかりでなく新しい生命誕生を喜ぶ人々の暖かな気持ちも含意している。戸外の寒と内の暖、そして夜の闇と産室の明かりの対照も目に浮かぶ。浄福の一夜を言祝ぐ佳句である。

汝が胸も燃えよと山火夜もすがら

幸一

遠く燃えさかる山火を夜目に眺めて、わが恋うるひともあのように熱烈に私を愛してほしいと切に思うのである。わが胸の燃える思いを桜島山の噴煙に比べた名歌が知られるが、この句では、夜を徹して燃え続ける山火に日もすがら夜もすがら燃える己が恋心を重ねている。

野焼あと草の芽起す風の道

正美

野焼あとの焼野原を吹きわたる風に誘われて、末黒の草木の残骸から驚くほど早く新芽が芽吹いてくる。野焼は、若草の芽生えを促すための農民の協同作業であり春先の行事だった。野は放置すると、薄や雑木に蔽われ忽ち荒地と化する。野焼はそれを防ぐ必須の作業であり、開墾や焼き畑耕作、放牧のためにも野焼は欠かせなかった。すでに万葉集に野焼の歌が多く出てくる。この句は自然の逞しい生命力をリアルにとらえている。

小町塚あるをこころに野焼かな

幸一

絶世の美女にして歌仙と謳われた小野小町は、老いて零落し漂泊の果てに死んだ。その墓所は奥州から九州各地に真偽不明だが所在する。小町塚はその墓所とも供養塚とも伝承される墳丘である。土地の住民は由来の小町伝説に愛着と誇りを今でも抱く。だから野焼きするときは、小町塚に害が及ばぬようにと心配りを忘れない。

野火止や野火と野火とが会うところ

敦子

野火止は野火の延焼を防ぐ拠点で全ての野火の終着点でもある。野火止塚は野焼きのときの野火の見張り場といわれる。武蔵野の玉川上水の分水路である野火止用水は有名。今は暗渠化が進むが、昔は重要な飲用・灌漑に活用された水路だった。用水の通る埼玉県新座市に野火止の地名がある。平安時代、在原業平が土地の豪族の姫と駆け落ちして草原に姫を隠したところ追っ手は草原に火をつける。姫は「武蔵野は今日はやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり」とうたうと不思議にも野火が止まったという、伊勢物語ゆかりの伝承からの地名という。業平塚と野火止塚が今も同市の平林寺境内にある。

野火守の誰にも遠き火となりぬ

幸一

野火守とは、野焼き作業に従事する人のこと。火を放

つと野火は四方へ延焼して、野火守から次第に遠離って行く。野火の火勢は強く、燃え盛る炎には野火守といえど近づけず、出来るのは火の道筋と焼け跡を見張ることくらい。最初は各所を分担して火を放った野火守たちも、暫くすると燃え進む野火を、天高く上がる煙をたよりに遠く傍観するばかりとなる。盛時後の静寂と焼野の広さをしみじみ感じさせる。

渡良瀬の野焼きの炎屏風立ち

高志

渡良瀬遊水池は、山手線内側の面積に等しい、周囲三十キロもある、我が国最大の遊水池だ。栃木県内外の利根水系の地域に、湖沼と葦原が広がる広漠たる湿地帯である。毎年三月上旬に環境保全と病害虫駆除のために葦原・草地の各所に火を放って野焼きを行うが、二時間余りで全てを焼き尽くしてしまう。作者は当日現場に赴き、その大規模な野焼きに対峙して観察した。天に沖する大量の煙で陰った空へ紅蓮の炎が燃え上がり、横一線に燃え進む様は、まさに巨大な火焰の屏風が眼前に聳え立つようであった。大規模な野焼きの壮観を下五の「屏風立ち」で的確にとらえている。

初恋の人に直球鬼は外

みち

身近に佇つ初恋の人に「福は内」と節分の豆をずばり直

球で投げ当てたのであろうか。そうなら幸いだったが、そうではなかった。思い切るべき初恋の人を戸外の鬼に見立て、それへめがけて心の中から振り切るつもりで勢いよく投げたのだ。それは自分の心を鬼にしている苦いものでもあった。節分の鬼に託して失恋の複雑な感情をテンポよく描く。俳諧の諧謔と軽みを感じさせる。

俳窓評論纂

＊艶寿会―下田實花追悼号―昭和六〇年発行の会誌が手元にある。下田 進さんからみちさんがいただいた。それは平成二十三年の春、高幡不動での誓子忌に宏之助さんから誘われて出席した席上で求めに応じて送られたものである。今また読み返してここに簡単に紹介する。下田實花（敬称略）は山口誓子（同略）の妹さんであられ、冒頭の会を主宰された。発足は昭和二十五年、最後の会報は二〇三回を数える。隔月の年六回発行していたので三十四年間続いた会誌であった。追悼号発刊に当たつての挨拶文の上に「花びらにゆるき力の芙蓉かな」（實花）の色紙が掲載されている。下田進さんは誓子先生の甥にあたると。掲載された写真帛句追悼文を寄せた人々がはなやかで興味をそそられる。中でも高浜虚子の「椿物語」

（S37）の中に「新橋の俳句を作る人々」（S26）がそのまま載せられている。艶寿会の成り立ち、俳句仲間の交流が詳しく書かれているのが一番面白く文芸的価値もある。虚子の文章は私に言わせれば、三島由紀夫の文章を平語で誰にでもわかりやすく読めるように書いたような文章でこれは余人ではなせぬ芸だと思う。以前読んだ「子規と漱石と私」（S58）も幸一さんからもった徳川慶喜の俳句を添削してむうとされた文章といい、人生に韜晦した飄々とした中にも正確な描写が綿々と綴られ、読後の余情が胸に漂うところ、それはこの文章も同じであった。新橋、鎌倉、小諸、大阪など花柳界というのでしょうか、芸者さんとの俳句を通じた交流が些細な一コマ一コマを会話体も交えて事細かく書かれていて、全体として心理模様人生模様が浮かび上がり余韻がただよってくる。大げさに言えば、源氏物語のもののあはれが余情としてある。一見はなやかではあるが、底流にその雰囲気がある。ここに今読んでも心が動かされる。美人の芸者さんに囲まれていい気なもんだなんて言ってはいけない。芸妓と文芸、通じるところがあるのだ。編集発行された下田進さんも予断を交えずありのままの資料を載せられているのがいいのだ。この追悼号は虚子のこの文章とそれに私

が実作を始めた年であったことなど自分に引きつけて懐かしく拝読致しました。追悼句をと思いましたが、直接存じ上げていない方ですので出来ませんでした。

＊「在郷の詩人 木下夕爾」を幸子姉から送られた。手元に持っている「新版児童詩集 木下夕爾著」の親版である。平成十四年（二〇〇二）に福山文学館の特別展に合わせて作成されたもの。夕爾の作品を抄出し、略年譜も載せた同館の愛情ある冊子になっている。私は平成十九年、中学の同窓会に出た時に神辺文学散歩の計画書を作り、私の親しんだ木下夕爾、井伏鱒二、菅茶山の家々を訪ね散歩録を残した。夕爾夫人に会い、お宅の庭に立っている句碑「家々や菜の花いろの燈をともし」の前で「ひばりのす」を百合子さんに朗読してもらい、その足で井伏鱒二生家を訪ね当主の章典先生と座談し、庭で于武陵の漢詩の訳サヨウナラダケガ人生ダを朗読してもらった。以上はちよいと思ひ出したので挿入した。本書の最後に俳句の項が設けられ、代表句が並べられている。私は夕爾句集を持っているので、よく知っている句ばかりであるが、こういう冊子の中で読むとまた新しい印象がある。やはり「遠雷やはづしてひかる耳かざり」「春雨やみなまたたける水たまり」は今でもいい句と思う。今回あれ！

と思つたのは、松永高校校歌の「あやにしき何をか惜しむ ただ惜しめ我が若き日を・」は原詩があるし、私
が広島を去るとき彼女にメモしてあげた詩の一節であつたことである。今原詩を探してみると、杜秋娘の

勸君莫惜金縷衣 綾にしき何をか惜しむ

勸君須惜少年時 惜しめただ君若き日を

花開堪折直須折 いざや折れ花よかりせば

莫待無花空折枝 ためらばば折りて花なし

であつた。これは、昭和4年（一九二九）年刊行の佐藤春

夫の漢詩訳詩集「車塵集」の最初にある「金縷衣」の訳

詩である。夕爾も校歌社歌など頼まれ仕事が増えて忙し

く漢詩を拝借したのだつた。これは批判に当たらない。

娘の名に与謝野晶子と同じ名前をつけるなど烏滸がまし

いかも知れぬが私に似た考えの詩人であつたと思う。（二

〇〇九年一〇周年を迎えた同館が「福山地方の詩と童謡」と題した

前述の文学者を含めた詩人達の紹介をした冊子がある。友人で館長

であつた皿海達哉さんから以前もらつたもの。この中に童謡詩人竹

内俊子の歌を歌う会の主宰に姉と同性同名の高田幸子さんが居ら

れます。「赤い鳥」の理事をされて居られた。今健在か否かは知ら

ないが、これは姉だけのためにここに書きました。他に福山の文学

者の顕彰をするなら鴈外や頼山陽や菅茶山に触れなければならぬ

と思うがそこまでは資料集めがなされていない。これが私には残念である。ついでに云うと、太平記の世界さらには古事記の世界まで遡る必要がある。私はそこまでのぼって福山の歴史を書くかと思つた時期もありましたが、関東に下つて俳句に染まつたのでこれは夢におわりました。これは脱線ですが、消さずに残します。)

＊、1927日経新聞文化欄に載つた「曾祖父遺品俳句史への扉」奈良雅子の文を馬場玄式君から送られて来た。奈良謙一(一八六四〜一九三三)は嵐雪の流れを汲む雪中庵に所属した俳人であり、奈良さんの叔母さんの家から見つかったと。明治三八年から八年分の会報が出て来て女流俳人の彼女がこれは貴重と思い鑑定者に見てもらつてこの度新聞社に持ち込んだもの。大刷物の二枚が特に貴重だと。基角を祖とする基角堂の八代堂主、田辺機一の短冊も見つかり、この奈良謙一は雪中庵九世の斉藤雀志、杉浦宇貴に師事していたとか。芭蕉没後この基角と嵐雪は確執があつて両派が江戸俳壇を二分、明治中期まで二〇〇年も反目していたとされる。しかし見つかつた資料によると、宇貴と機一は選者として名前が並んでおり、そんな反目は見えないとか、子規が月並み・陳腐として俳句革新を唱えたが、一方で旧派のこれらの俳人は懸命に研鑽していたのだと想像して書いている。(以前紹介し

た頼祭書屋俳話・芭蕉雑談」(正岡子規著岩波文庫二〇二六)に子規が書いている。芭蕉以後の其角、去来、嵐雪、丈草、許六、支考、凡兆、正秀、乙州、李由如何、白雄、蓼太、蕪村、曉台、闌更如何。彼らの壮は芭蕉の壮に及ばず、彼らの大は芭蕉の大に及ばざりき。文政以後蒼虬、梅室、鳳朗の如きは群蛙と云つてゐる。「吁嚟、芭蕉以前に芭蕉無く、芭蕉以後復た芭蕉無きなり」と結んでいる。これから見ても私が今まで読んで来た考えからも上の子規の見立ては尤もなものである。奈良さんの曾祖父として群蛙ではないか。)

芭蕉のかるみ以後(49)

光成高志

のり物に簾透く顔おぼろなる

重五

籠とか輿にある人の顔がすだれ越しにほのかに見える意。前号の「花をかむ」人をやんごとなき身分の人がその時を得ないで嘆くさまと見て、そのほかない余情を移した付け。『太平記』の俊基朝臣関東下向、池田の宿などの俳か、と古典文学大系にある。それは太平記の中に俊基朝臣再関東下向事に詳しい。有名な「落花の雪に踏み迷ふ、・・」の七五調の道行きの軽やかな名文は昔の人は皆暗唱させられたとか。江戸時代後期の松平定信の書いた「婆心録」では左遷遠流の人であると言っているから、先人の見解を尊重してその俳か、としたのであろう。

いまだ恨の矢をはなつ声

荷兮

今こそよき機会と恨みの矢を放つ時のえいつと叫び声がするの意。すだれごしの顔がおぼろに見えたという言葉に、外から窺う人の感じを受けて、仇討ちとか暗殺の場を思い寄せた付け。附合考では曾我兄弟の仇討ちも思い出られるとある。

ぬす人の記念^{かたみ}の松の吹おれて

芭蕉

盗人のかたみの松は、美濃国に熊坂が人見の松としてあるものである。この松は平安時代の伝説上の大盗賊・熊坂長範が、松の木から東山道や鎌倉街道の旅人を見張つては、身ぐるみをはいでいたという伝説に基づく。長範は、謡曲「烏帽子折」「熊坂」にも出てくる盗賊で、奥州に向かう牛若丸を襲ったが、逆に討たれてしまったとも伝えられている。盗賊にゆかりのある松の太木もいまは風のために吹き折られているという前句の背景を付けたもので、暗殺などにふさわしく懐憶荒涼の気がただよう。「恨み」の語は「盗人」に、「矢を放つ声」は「吹き折れて」で受けている。この松は大垣に近く芭蕉はどうに知っていたであろうと思われる。

しばし宗祇の名を付し水

杜國

かつて宗祇の水と名付けられた清水の意である。前句を伝説の古松も今は吹き折れて名のみとなつて昔の佛をとどめないとみて、無情流転の余情を感じ、同じような名所として近江の醒ヶ井の清水を付けたのである。つまり前句とこの付句は律詩の格

であつて、盗人に宗祇、美濃に近江の対をなしているのだ。前述の「落花の雪に踏み迷う・」の中段に醒ヶ井は出てくる。東海道は南の土山を通るが、ここは北国街道の近江路にある。

笠ぬぎて無理にも濡るゝ北時雨

荷兮

わざと笠をぬいで時雨にぬれてみるということで、前句に歌枕などを探る人を感じて、その風狂ぶりを句作した付。時雨は宗祇の名句「世にふるもさらにしぐれのやどり哉」の連想。北時雨としたのは、定家謡いに云う山より出づる北時雨とあり、その注に時雨は北より降るものなれば北しぐれということであるによつた。笠は宗祇の行脚の用であり、時雨は縁語。撰集抄に殿上人が東山に花見に出かけた折、にわか雨にあつた。この時中将実方は「桜がり雨は降りきぬ同じくは濡るとも花のかげにやどらん」と詠じて、雨に濡れつゝ花見をした。この逸事を踏まえている付だ。奥の細道に芭蕉は実方の塚のある笠島はどの辺りであろうか、尋ねてみたいが、五月雨のためぬかった道では足をとられて行くこともできないという「笠島はいづこさ月のぬかり道」という句をのこしている。西行は「朽もせぬ其名ばかりをとどめをきてかれのゝ薄かたみにぞみる」と山家集に歌を残しており、この実方の塚を見てゐるのに、芭蕉はさぞ行きかったらうにと思ふ。

冬がれわけてひとり唐草^{たちぢき}

野水

どの草も冬枯るる中に、ひとり唐萱のみが青々としている。冬枯の中に唐萱の青きを珍しがりて出す句である。前句の北時雨の降る場にあふと見出したものとして付けたもの。前句の場のあしらいであるが、時雨のわびを楽しむ孤高の詩人の匂いが移っている。

しらぐと砕けしは人の骨か何

杜國

白々と散乱して見えるのは、人骨かそれとも貝殻などかと疑った体。前句の満目枯槁の中ひとり生氣あるものに対して寂滅を対照させた付。

鳥賊はるびすの國のうらから

重五

鳥賊の甲は夷狄の占形であるの意。前句の人骨らしきものの放棄してあるのを夷狄の国と見、「何」の語から占いを思いよせたのである。白々と砕けているものを鳥賊の甲として仕立てた付。鳥賊の甲を占形としたのは夷からの連想。北国の漁師は鳥賊を投げてその多く落ちた方へ出漁するというからその伝承から思いついた付か。

あはれさの謎にもとけし郭公ほととぎす

野水

夷狄に占形から蜀のホトトギスの故事を思いよせ、身の上を占う流罪の人と見た。今の郭公の一声によつてわが運命の謎は解き得ず、胡地に果てることかと悲しむさまである。あはれさののは、やともはともおくべきところ、あはれが前句異郷にある人の運命

と、伝説の鳥郭公にも気分としてかかるように仕立てたのである。ほととぎすは故事に基づいて、杜鵑 子規 不如帰 杜宇 蜀魂 時鳥 田鵲 郭公 霍公 霍公鳥 查手鳥 杜鵑草と書かれ、皆ほととぎすと読む。

秋水一斗もりつくす夜ぞ

芭蕉

漏刻から水一斗が漏壺に出尽くす夜であるの意。秋水の秋は季のあしらいで、一斗とは今の181で秋の夜長を表す言葉。前句の謎を秋の夜長を庚申待ちなどで、大勢寄り集まって謎々あそびするさまとした付。前句のホトトギスは夏から秋への季移り。

謎という字をとがめて、秋の夜長のさまを付けたおもしろい付。

日東の李白が坊に月を見て

重五

日東は日本、李白は酒好きの詩人であつたので、日本の李白と呼ばれている詩人の家で月見をしての意。前句の秋水一斗の秋水を酒に取成し、杜甫にある「李白一斗詩百篇」（飲中八仙歌）の詩句から李白を連想し、秋の夜長を日本の李白の観月の宴と句作した付。飲中八仙歌の李白の所は「李白一斗詩百篇 長安市上酒家眠 天子呼來不上船 自称臣是酒中仙」である。訳は「李白は酒を一斗呑むごとに百篇の詩を作る。長安の町中の居酒屋で飲んだくれて眠っている。陛下からのお召しがあつても船に上がらない。そして自分のことをこう言うのだ。『酒中の仙人でございます』と。」

受贈誌(平31年2月号)

木更津港渡り水夫の春セーター(東京クラブ) 万世遊

オリオンを夜間飛行機掠め行く(リ) //

喚声の後の静寂追儺かな(リ) 璃子

磯波や汀の果ての雪の富士(リ) 栄

小刀の銘は「肥後守」魚は氷に(リリック鍛錬会) 環

去年今年催馬楽奏上神楽殿(喜慕哀楽102) 山田富朗

しろがねの淡雪残る土橋かな(リ) 間森 坦

テレビはニューイヤークンサートに限る(リ) 光成高志

水上バス追ふ数の増え都鳥(夢か二月号) 山尾かづひろ

山尾かづひろ吟行ノート(二月) 光 みち

手の窪に愛づるひとつや蒔の臺 光成高志

餅焼くや膨れはたまた裏返る 光成高志

お便り広場(到着順、敬称略)

バレンタインチョコと朝ドラで安藤百福役の萬平さんが発明した日清食品チキンラーメンをどうぞ。寒いのでご自愛ください。(2.1 昴子)

(安藤百福は亡母とほぼ同い年です。その一生は波瀾万丈大金持ち、私の母は子を沢山産んで未亡人、ほんとに人の人生は面白いものです。私も研究開発を仕事にしていたので、萬平の気持ちがよくわ

かります。池田市には昨年行ったのでここもよく知っています。カップヌードルは協力者の博士がよく私に云って発破を掛けていたのを覚えています。高志

この間お正月をしたと思つたらもう二月になりました。どんどん月日が過ぎて行きます。毎日同じ日を過ごせているけど、今鎌田実先生の人間らしくヘンテコでいいと云う本を読んでいます。自分らしくヘンテコでいいんだと思うようになりました。でも努力している人間の多くいらつしやる事にびっくりし考えさせられています。元気な身体に産んでくれた母に感謝です。みかん伸明が会社のおつきあいで買ったものです。瀬戸田の産地直送です。高志おじさんに送ると云って自分で荷造りしました。近所にも少しづつ配りました。取急ぎ乱筆にてお身体に気をつけてね。(2.4 幸子)

高志おじさん敏子おばさんお元気ですか。風邪などひかないよう気をつけて下さい。僕も母も元気で頑張っています。蜜柑と八朔を少しですが買ったので食べて下さい。お身体に気を付けて下さい。(2.4 伸明)

(幸子姉さん、鎌田実さんのいい本をお読みですね。この人はほんとに偉いです。故田野原という聖路加病院のお医者さんとも、トットちゃんこと黒柳徹子さんとも共著の本を出していますね。私の腰の手術

をしてくれた若い医師は同じ太学の出です。今も付き合っています。
伸君 蜜柑ありがとう。高志

前略 白金霞一月号ありがとう。正月もすぎても春になりました。正月には孫やひ孫が皆来てにぎやかな正月ができました。私は元気でいます。諺にあるように男やもめは何とやら人に笑われないように家の片付け外の片付けいくらやつてもきりが無い。(中略) 2/3 回目の尾道等巡り行ってきました。リュック背負ってゆつくり巡って来ました。ちよつとしんどかったな。ご判読下さい。草々

(26 健)

早くも二月、すでに十日を過ぎ怠けの虫をそろく追いつ出すべく頑張らなくては、と思うようになりました。九日の句会に雪の心配をしつゝ出ましたが、予報は外れ、化粧塩の如き雪で終り相も変わらぬ白っぽい庭土で乾燥は続きそうです。句会で最高齢次なる方は七十代となると如何に共感の得られる話が少なくなったかを思い知りました。二月十一日、昔の紀元節天長節明治節それぐに歌あり、小学校では校長先生はモーニングで校庭の奉安殿からウヤクしく紫のふくさを掛けたもの(多分教育勅語)を持ち出し、その祝日の歌を歌って子共達は頂いた紅白のお菓子を持参の白いハンカチに包んで式が終った

学校を後にしたものでした。お菓子は紅白の鶴の子又は校章と国旗(目の丸ではなく軍艦旗のよう)の紅白の打ちものでした。前述の三つの歌どなたもご存じありませんでした。節も歌詞も二番くらい覚えて居て満州国皇帝来日の折りは、毎日満州国々歌の稽古でした。どんぐ永眠、会も消滅しましたが、同じ時代を同じ経験をしたからこそその共感の話題だったと思います。同居人が猫では昔の面白い話を聞かせたくても、昔はおかかのニャンコ飯がキャットフード育ちでは若い方と同じく共感は得られないことでしょう。毎年二月は一番寒いと思いますのでますますお身おいとい下さいませ。二月十一日長屋璃子

光成高志様光 みち様

追伸…一月号芭蕉のかるみ以後(48)及び喜怒哀楽誌についての記述、ゆつくり読みました。林不忘の名もなつかしくインフルのせいで少しゆつくり読む時間を得ましたのかも。

一、雲にそびゆる高ちほの高ねおろしに艸も木も

なびきふしけん大御世を仰ぐけふこそ樂しけれ

二、うなばらなせるはにやすの池のおもよりなほひろき
めぐみのなみにあみし世を仰ぐけふこそたのしけれ
三、天つひつぎの高みくら千代よろづに動きなき

もとゐ定めしそのかみを仰ぐ今日こそたのしけれ

四、空にかがやく日の本の萬の國にたぐひなき

國のみはしらたてし世を仰ぐけふこそ樂しけれ

(紀元節の歌詞)

今日のよき日は大君の うまれたまいしよき日なり

今日のよき日は御光の さし出たまいしよき日なり

光あまねき君が代を 祝え諸人もろともに

恵みあまねき君が代を 祝え諸人もろともに

(天長節歌詞)

一 アジアの東 日出づるところ

ひじりの君の あらはれまして

古きあめつち とぎせるきを

大御光に くまなくはらひ

教あまねく 道明らけく

治めたまへる 御代たふと

以上璽子さんの手紙の三つの歌の歌詞を書いておきました。

すみません。欠席いたします。投句よろしく願いた

します。実は「吹越」歳時記にみあたらないくて・・(勉

強不足です。)次は出席いたすつもりであります。なおい

つも心から感謝しております。

(215 素子)

十周年記念兼題句撰集(3)

枯野

がうぐと風が鳴るなり枯野原

*一筋の繁道しげしの通る枯野かな

枯野行く風飄々と髯を吹く

高志 健二 昭七

*一筋の道が枯野の中に通っている。通る人が少なく草が茂っている道である。繁道しげしは万葉集に「大野路おのちは繁道しげし茂路むちみ

茂くとも君し通かよはば道は広けむ」(作者未詳)の繁道を使った

ものであろう。この一筋の道と枯野との係りが句の命。我が人生は

斯くの如き枯野である。枯野の寒往けば則ち暑来たりであつて青々

とした青野になる未来があるのだという「かな」である。一筋の道

はわが道なのであると。

炬燵

*朝まだき母が炭足す炬燵かな

熱うして後生極楽おきこたつ

父母のゐてはからの居て炬燵かな

*早朝 まだ明けやらぬ部屋の中で母がひとり起きて炭を継いでい

る。いつも家族の知らぬ間に起きて働いていた昔の母親像である。

炭を足す炬燵なども懐かしい。これは掘炬燵で、部屋の暖房はこれ

だけだったかも知れない。「まだき」は「未だし」に近いと辞書に

あり、久しぶりに聞く語であるけれど、効果があつて昭和の回顧的

な情緒を強めている感じがする。

新年一般 (H29)

三日月と太白睦む二日かな

高志

句集手に母の笑みます去年今年

正美

白鳥が啼きつつ飛んで初日の出

高志

書初や和氣和氣致祥

幸一

明けきつてみな幻の除夜の鐘

幸一

*老いぼれといはずに慈姑召し上がれ

みち

*姑と嫁さんの会話

「老いぼれ」「老いぼれ」なんておつしやらず

にもつと「くわい」を召し上がれと嫁さん。くわいをカナ書きせず

わざわざ「慈姑（おひさま）さん」としたところに皮肉がひかる。

皮肉たつぷりの句。

孝三

梅 ポップコーンはぜるごとくに梅ひらく

正美

寒梅や枝に触るゝまで絵馬の嵩

孝三

雪解

孝三

雪解や球根既に目覚めをり

陽一

*雪解村茂吉の肉声流れけり

みち

*茂吉の故郷に近く多くの名作の残っている上山、そこに茂吉の自作

朗読の録音が聞こえるのである。歌は何か。上山であればさしあ

たり「朝来れば銃に打たれし白き鬼・」か、「ふた別けざまに簪え

給う蔵王の山・」か、僕も自作朗読は録音で聞いたことがあり、

独特の野性味がある庄重な読み方には感動した。ゆかりの土地で聞

くと一入であろう。肉声の語が茂吉好みの語感を伝えている。茂吉

はこんな肉體性を引き摺った生々しい措辞が好きであった。

東風

東風吹くや天満宮の太鼓橋

多美子

*手賀沼やひかり満面東風の坂

孝三

東風吹いて海鮮やかに藍となる

昭七

*我孫子は南北手賀沼を圍繞する丘陵地に發達した町で、数多い坂と

谷津のすべてが手賀沼へ向いている。どの坂を下つても春光漲る沼

が目の前に広がる。今年もまた東風の季節。春の到来を坂を吹いて

くる風に実感するのである。

高志

涅槃 *金棒を放り赤鬼涅槃哭く

高志

竜王は舌を長出し涅槃哭く

孝三

涅槃哭く迦陵頻伽は尾を立てて

宏之助

*この世の終わりとみな嘆く秋嘆場の絶頂で、勇猛な赤鬼までもが大

事な金棒を放り投げ徒手空拳を突き上げ慟哭せずには居られない。

仏滅の悲嘆ふりを喜劇的盆景を捉えることで描き出す俳諧味が秀逸。

我孫子日記

1/18	会
1/23	SOA
1/30	SOA
2/3	
* 布施 弁天 / 竹内 神社	
2/6	SOA
2/9	源氏 (澤標)
2/13	SOA
2/15	会

*年男女ならで並んで豆を撒く

大臣も来て豆撒く弁天堂

豆撒の帰途に詣でる如来堂

節分や相馬霊場の梅開く

大師堂振鈴鳴らず梅二輪 (みち)

「もうないの」宙の手残る豆撒会

「福は内」のみ鎮守の森の豆撒会

群衆の顔照らす灯や節分会 (みち)

節分会丸餅一つ拾ひけり (みち)

編集後記

下の絵は yume さんが描いたもので夢の中に野田の少女が現れたので描いてみた、よかったら見てくれと言うので、ここに掲載しました。私にはよくわからない抽象画を描く方ですが、この絵は理解出来ました。

昨日弘田龍太郎作曲の童謡を聴きに古賀ミュージアムに行ってきた。海沼実さんの解説の中で歌う音羽ゆりかご会の子どもの達の歌声に心動かされるものがありました。CD 付の童謡集を買いましたので、もしよろしかったら句会の間にお聞かせできます。



ゆめさんの絵 (2/14) : 虐待死の少女を描いたと。

白金霞 一月号 (通巻第九五号) 平成三十一年二月十九日発行

編集・発行人 光成高志 発行所 一七〇・一二九 我孫子市南新本二四・七

表紙の題字…加納綾女 同写真は平成三年二月十八日の白金霞